

〈論文〉

看図作文授業の追試研究 (VI)
— 学習者による看図作文用絵図の創作の試み —

伊藤公紀¹ 石田ゆき² 伊藤裕康³ 石川清英³ 鹿内信善⁴

1 はじめに

中国では伝統的に看図作文と呼ばれる国語教育が行われてきている。筆者らは中国の看図作文をベースにし、教育心理学や記号論・物語論等の研究成果を取り入れ、「新しい看図作文」(以後「看図作文」と略記)として体系的に整備してきた。看図作文については、たとえば『やる気をひきだす看図作文の授業』^[1]や『看図作文指導要領』^[2]にまとめてあるので、ここではその詳細については省略し、概略の説明に留める。

看図作文は、絵図や写真等の観察を作文指導の中に取り入れている。絵図等に描かれている事物・事象を観察させることで、絵図要素に内在する属性を学習者の既有知識を用いて意識(変換, translation)させ、それらの要素間に有意義な関連を創出(要素関連づけ, interpretation)させるプロセスを含んでいる。さらに、絵図には描かれていない事物・事象を試行錯誤的に補完(外挿, extrapolation)し、その中から無矛盾で説得力のあるストーリーを構成させる手法である。

筆者らは絵図の読解を大きく2つに分類している。すなわち、文脈解釈型と物語創造型である。文脈解釈型は、絵図に含まれるオブジェクトを適切に抽出し、それらのオブジェクトを相互に関連づけ、絵図全体として矛盾なく説明するように読解し文書に起こすものである。物語創造型は、文脈解釈型と同様に絵図に含まれるオブジェクトを抽出するが、オブジェクト間の関連づけに文脈解釈型と比較してより多くの補完を必要としている。その補完の種類や量によって無矛盾な絵図の解釈が可能となり、発想力・想像力が鍛えられる。すなわち、物語創造型の読解は文脈解釈型の読解よりも高次の要素関連づけや外挿を必要とする。しかし、

¹ 札幌大学経営学部経営学科

² 駒澤大学附属岩見沢高等学校

³ 道都大学美術学部建築学科

⁴ 北海道教育大学教育心理学研究室

このことは必ずしも文脈解釈型の読解の重要性を否定するものではない。自然科学や社会科学で必要となるデータ・資料等の判断・推理および考察のためには文脈解釈型のスキルは重要である。

伊藤ら¹³⁾は、看图作文において学習者が作文を書く際の情報源となる絵図の呈示数を徐々に減らし、絵図を与えずとも創造的な作文を書ける手法を提案している。これは学習者が作文に必要な絵図を自らイメージする能力を高めさせようとしたものである。その実現のために、絵図の補完に適切な制約条件を与える方策を用いた。その制約条件は、ストーリーを創作する前にキャラクター（登場人物）を呈示するものであった¹⁴⁾。この研究では、キャラクターの設定さえ充分に行なっていれば、最終的には学習者に絵図を1幅も呈示しなくても作文が書けることを確かめている。

本論文では、上記の研究をさらに進め、絵図そのものを学習者に創作させようとするものである。すなわち、まず学習者に看图作文の原理・原則を理解させ、その後、授業者の視点にたつて看图作文授業で必要となるオリジナルな絵図の創作を行わせることを目的とする。なお、学習者は大学生とする。授業者はキャラクター設定等の制約条件はつけず、学習者は自由に絵図をデザインすることとなる。また、その絵図を用いて創作する作文は、絵図をデザインした学習者ではなく第3者の学習者に書かせることとした。

2 実験授業

実験授業は本論文の第5筆者の鹿内が北海道教育大学で担当している「発達と学習」の授業の一環として行われた。受講者は芸術課程の学生107人である。

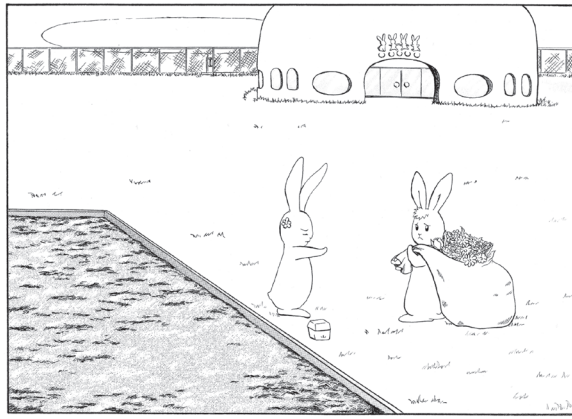
実施日は2011年5月20日、6月3日および6月10日である。

なお、実験授業で用いた本論文に掲載している看图作文用絵図はすべて第2筆者の石田のオリジナル作品である。

2.1 看图作文指導第1時限目

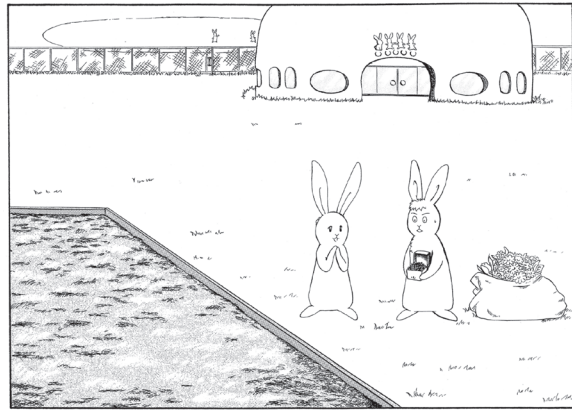
授業者は、図1～図3の看图作文用絵図「うさぎの幼稚園」を用いて授業を行った。すなわち、変換、要素関連づけ、外挿の各作業を行わせ、作文を完成させた。本論文では実際の授業記録等の詳細は省略する。

看图作文授業の追試研究（Ⅵ）



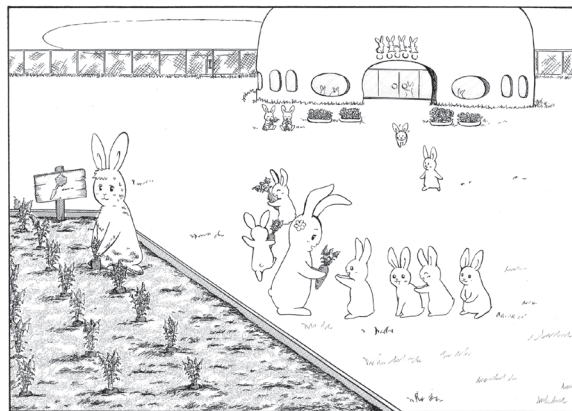
©yuki.ishida

図1：看图作文用絵図「うさぎの幼稚園」1幅目



©yuki.ishida

図2：看图作文用絵図「うさぎの幼稚園」2幅目



©yuki.ishida

図3：看图作文用絵図「うさぎの幼稚園」3幅目

看图作文指導の第1時限目では、上掲の絵図を一度にすべて呈示せず1幅ずつ呈示し、変換、要素関連づけ、外挿の各活動を行った。その後、1人を除く学習者全員がほぼ同様なストーリーを構成し作文を完成させている。

同様なストーリーを構成したことは、授業者が誘導したものではない。この結果は看图作文用の絵図の特性に起因すると考えられる。すなわち、絵図「うさぎの幼稚園」には意外性のある事物・事象が比較的少なく描かれている。発想を飛躍させるための材料となる要素を抑えることで、学習者の発想の方向性のある程度一定方向に収束させることができる。このような絵図を用いた作文は「文脈解釈型」の作文となりやすい。すなわち、絵図に描かれている事物・事象を時系列にそって説明的に物語を構成するものである。

ただし、絵図「うさぎの幼稚園」も看图作文で用いる絵図であるため、その絵図の中には「謎」が意図的に仕掛けられている。

たとえば、図1では何も植えられていない畑と草花を持って来た雄のうさぎを拒絶している雌のうさぎが描かれている。学習者はなぜ雌のうさぎが拒絶しているのかについて後のストーリーに矛盾しないよう想像しなければならない。また、雌のうさぎの足下に置かれている小さな箱がどのようなものなのかについても想像しなければならない。なお、絵図のタイトルは学習者には呈示されないため、描かれている建物や場所がどんな所なのかについても想像を働かせなくてはならない。

学習者は絵図中の事物・事象について変換・要素関連づけ活動をしながらか、絵図には描かれていない事柄についても外挿し、3幅の絵図すべてを使用し、無矛盾なストーリー構成をめざしていく。

次の作文は学習者の典型的な作文例である。

■学習者Iの作文

タイトル:どちらにしようかな

うさぎの学校には、まだ何も植えていない畑がありました。

ある日の植物委員会で、植物係のうさみちゃんとうさおくんは、畑に何かを植えることになりました。

「お花をたくさん植えよう」

と、袋いっぱいのお花をうさおくんは持ってきました。

「う～ん、それもいいんだけど…」

うさみちゃんが持ってきたのは、小さな箱でした。うさおくんが箱の中身をあけると、

みんなの大好きなにんじんの苗が入っていました。

お花とにんじん。どちらを育てるか悩む2人。そこでうさみちゃんは、ある提案をしました。

数ヶ月が立ちました。あの畑はどうなったでしょう？畑には、おいしそうなにんじんがたくさん実っていました。学校みんなは、おいしそうなにんじんに大喜びです。では、うさおくんが育てたかったお花は…？

校舎のすぐ近く、みんなの教室から見える所の植木鉢にたくさんのきれいなお花が咲いていました。

うさみちゃんとうさおくんは、両方を大切に育てたのでした。

一人の例外を除いて、残りの全員が上掲の作文と同様な構造・展開のストーリーを構成していた。その共通した特徴は、微笑ましいほのぼのとした展開であり、子ども達の好物のにんじんを植え、その収穫と子ども達の笑顔で幸せな気持ちになるという展開である。このストーリー構成は3幅の絵図「うさぎの幼稚園」に描かれている事物・事象を十分に説明しており、かつ構成上の矛盾もない。

しかしながら、絵図「うさぎの幼稚園」を用いた作文の結果をみると、学習者が個性を発揮できた余地は、修辭的なスキルに留まる傾向が強かった。第2時限目においては、ストーリー構成上の無矛盾性を維持しつつ、より個性的な作文を書き上げることを目標とする。

2.2 看图作文指導第2時限目

前時の授業における看图作文授業は「文脈解釈型」をねらったものであったことを学習者らに報告し、本時では「物語創造型」をめざすことを伝えた。物語創造型とは、与えられた状況を大胆にかつ無矛盾に補完しながら、個性豊かなストーリーを構成することを指向するものである。授業者は、前時に書き上げた学習者の作文の中から文脈解釈型の授業結果としての典型的な作文と物語創造型に類別される作文を書き上げたを学習者MKの作文をそれぞれ呈示し、本時の物語創造型の授業のイメージ形成を助けた。

その際、呈示した学習者MKの作文は以下のとおりである。

■学習者 MK の作文

タイトル: 男の一生

「ここにお花がいっぱいあるといいわね。近くの森から摘んできてもらえないかしら」と彼女は言った。

私は森中を歩きまわってきれいな花を厳選して、袋いっぱいに入れて持って来たのだ。それなのに、

「やっぱりお花はやめて、ニンジンを植えましょう。子ども達も喜ぶでしょう」とは何だ。私の苦勞を返せ。

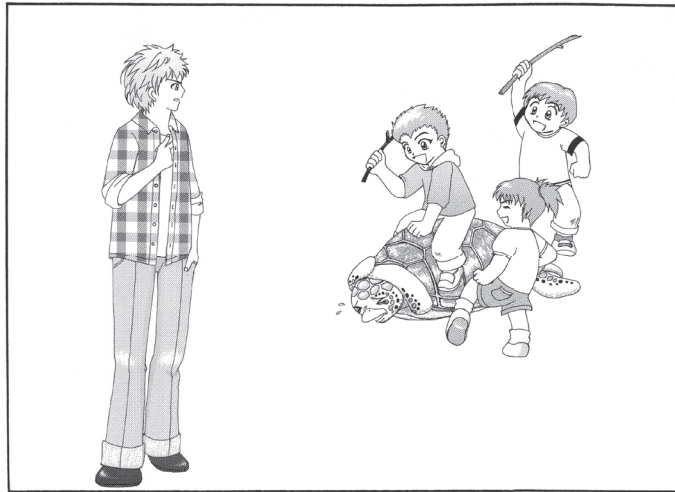
彼女は小箱に入ったニンジンの種を私にくれ、「ここに植えてもらえないかしら。スコップは持っていないから近所の家から借りてくるか、買ってきて。私はこれから子ども達の世話をするから、よろしくね」と言い、さっそうと逃げていった。

まったく、何ていう女だ。幼稚園のお姉さんってのは園児にしか優しくしないのか、と彼はつぶやいた。彼も幼稚園で働いていて、彼女より歳は1つ下である。はじめ、彼が働き始めたとき、彼は園児同様、すてきなお姉さんだなあ、と思った一人である。ところが園児がいないところでは、彼女の態度は急変するのである。もちろん表面上の笑顔はのこしたままで。

結局、ニンジンを掘るのも私なのか。園児らは「ありがとうを必ず言おう」のスローガンをしっかり守り、「お姉さん、ニンジンをくれてありがとう」と言う。まったく、思い通りに使われてたまるものか…。

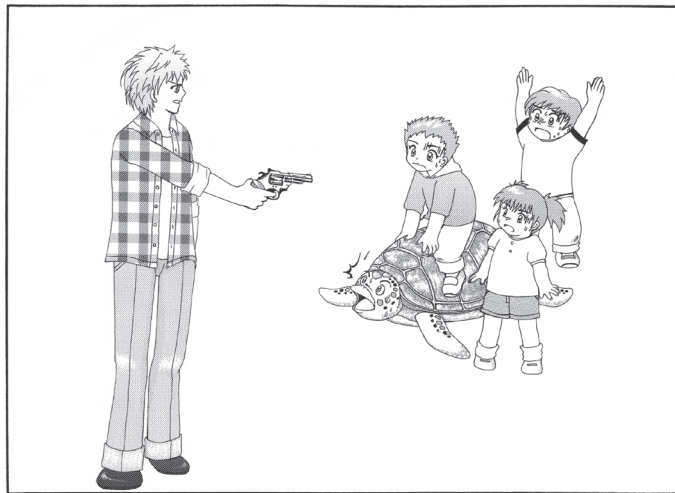
「男なんて働いていればいいのよ」

物語創造型の看図作文授業を成功させるためには、相応の絵図が必要となる。本時では看図作文用絵図「浦島」を用いる。「浦島」は図4～図6の3幅から構成されている。なお、本時においても、絵図は1幅ずつ学習者に呈示している。



©yuki.ishida

図4：看图作文用絵図「浦島」1幅目



©yuki.ishida

図5：看图作文用絵図「浦島」2幅目

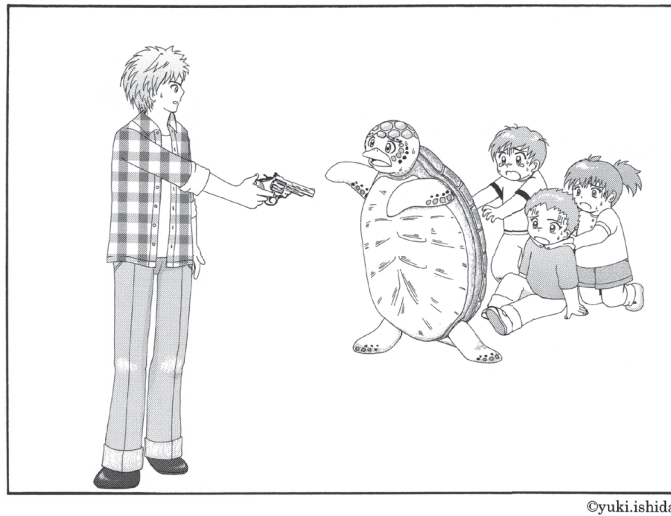


図6：看图作文用絵図「浦島」3幅目

「浦島」は「うさぎの幼稚園」に比べ、意外性のある絵図構成となっている。

1幅目の絵図は、日本の民話『浦島太郎』を想起させる構成となっている。しかし、2幅目や3幅目の絵図は多くの学習者にとって予想外の展開である。1幅目の絵図が一般的で読み解きやすい絵図であるために2幅目以降の絵図との大きな隔たりを感じるようになる。実際、多くの学習者は2幅目の絵図を目にしたとき、「えーっ!」といった慮外な思いを声に出すことが多い。

こうした意外性のある絵図は、それを無矛盾に解決するために大きな、かつ多くの外挿を必要とし、その結果創造的なストーリーが考案されやすくなる。

作文を書く時間は60分間とし、授業者は完成後それらを回収した。

2.3 看图作文指導第3時限目

第2時限目において作成された作文は、第1時限目のものと比較し、非常に創造性に富むものが多数作られた。授業者はそれらの中から特徴の異なる7編を選び、学習者に呈示し、この中から自由に4編を選びコメントを付す作業を行わせた。

2.3.1 学習者への呈示作文

以下の7編の作文は授業者が学習者に呈示した作文である。なお、作文のタイトルはつけるように指示しているが、つけていない学習者も存在している。また、今回の実験授業では、時間の関係上、推敲指導を行っていない。そのため冗長な表現や不適切な段落など

が混ざっていることがあるが、そのまま掲載している。なお、明らかな誤字や送り仮名の間違いなどは修正してある。

■ 1. 学習者 D の作文

タイトル: 無題

子ども達がよってたかってウミガメをいじめている。なんて悪い子ども達だ。どうにかしてウミガメを助けてあげたいが、どうしよう…。そうだ! たしかけっこう前の授業で鹿内先生から『ユダヤ人のパン屋』の例を教えてもらったな。それを使えば、子ども達がウミガメをいじめている動機が内発的動機づけから外発的動機づけに変化して自発的にウミガメをいじめるのをやめるはずだ。よーし! 待ってろよ、ウミガメ!! 今、助けてやるからな!!

— 数日後 —

なぜだ。なぜ、子ども達はウミガメいじめをやめない? 今日もまたウミガメをいじめている。3日前、もうそろそろ子ども達にお金を与えるのをやめようと思ひ、子ども達にお金を渡さなかったら、自分が返り討ちにあつてサイフごと持っていかれた。最近の子どもは怖い。

昨日、鹿内先生にウミガメのことを相談したら、授業内容を理解していない、とひどく怒られた。「ユダヤ人のパン屋」の話を書いたノートに20回書いて提出しなくてはならなくなつた。しかも、僕は授業を3回休んでいたんで、単位を出してもらえないそうだ。最悪だ。

こうなつたのも全部あの子ども達のせいだ。仕返ししてやる。子ども達から僕のサイフを奪い返すんだ。その為には銃を用意した。準備は万全だ。やってやる。

「おい! カメをいじめるのをやめろ!!」

よし、さすがに子ども達もビビっている。まさか銃をつきつけられるなんて思つてもみなかっただろうからな。ん? なんだ? カ、カメが立ち上がつてしゃべつた!!!?

「私を助けてくれるのはうれしいですが、銃を捨てて下さい。こんなことは間違っています」

あ、ありえない。カメがしゃべり出すなんて!! しかも子ども達をかばうなんて!! ついさっきまでいじめられていたのに、いじめた子どもを助けるなんて!!

あれ? この状況、僕が悪者になつてない?

注) 『ユダヤ人のパン屋』の例とは、外発的動機づけ(報酬)は内発的に行なつていた活動への興味を失わせてしまうことを説明する挿話である。

■ 2. 学習者 M の作文

タイトル：言い訳

俺は歩いてたんだよ。路上ででかいカメをいじめてるガキ達を見つけたんだ。一見茶髪でチャライ俺だが、人の倍は正義力に溢れてるつもりだ。だから俺はガキのいじめをやめさせるために銃をガキにつきつけたのさ。もちろん玉は入っちゃいねえ。普段はケンカで威嚇するために出したりしてる。だから今回も威嚇するために出したのさ。説教や論しは俺の役目じゃねえ。カメも痛がってるし早くやめさせたかったのよ。

銃を突きつけて「オイコラ、やめろ。カメが痛がってるじゃねえか。早くやめねえとコレで殺るぞ」と一言ぶっぱなしたんだ。その瞬間ガキ達は驚いて怖がって、真っ青になってやがる。所詮ガキだな。と思ったその時、カメがなんとガキ達をかばい出したんだよ。

いじめられてたのに、なぜ？ しかも立ってだぜ。奴は後ろにデカイ甲羅を持ち合わせてるってのに、その弱い部分を出してガキどもを守ろうとしたんだ。まさかの展開さ。

だから俺はカメに「オイ、こいつらはテメーをいじめてたんだぜ？ だからテメーを助けてあげようと思ってんのになんでこいつらをかばうんだ？」って聞いたんだ。するとカメは「そ、そんなかわいそうなことやめてあげてください。僕ががまんすればいいんですから。カメはもういじめられてなんぼの動物なんです。僕はいいけど、そんな銃で子ども達を…。やめてください…」って言うんだよ。

そんなに必死で訴えられたら俺もたじろいじゃってよ。なんか俺と違う正義感でびっくりしたぜ。だがイジメはいけねえことを教え込ませなきゃいけねえから真っ青になってるガキに「オイ、誰かをいじめたら自分に返ってくることを覚えておけ。カメに感謝しな」って言ったのさ。

その後は知らねえ。「カメさん、ごめんなさい」って声が後ろから聞こえてたりしたがな。お前に会うために急がなきゃいけなかったからな。いや、本当だよ。本当にそんな出来事があったんだよ。寝坊じゃねえよ。カメを助けられたから許してくれて。な？ お前が欲しがってたカバン、買ってやるから。

■ 3. 学習者 K の作文

タイトル: タートルズ

そもそもは僕が子どもにいじめられていたのが原因なんだろうけどさ。子どもに危険をもたらしたのが僕じゃないとも言え張れないから、僕も子どもにあやまっておいたよ。お互いにゴメンして…って、それは僕が寛大だからじゃなくて、僕と子どもは被害者同士であって、事が落ち着いた頃には、僕がいじめられていた構図なんてのはどっかに吹っ飛んでたからな。

まあそんなことはどうだっていいんだよ。

実際、あの場面で誰が一番危険な状況にあったと思う？

…彼だよ。銃を取り出したチョー本人。何でかって？見てなかったの？まあいいや、教えてあげるよ。

彼が銃を取り出す瞬間、僕はじっと見てたんだ。じっと見てたってのは、彼が子どもを鬼みたいな目で見てたからね。あ、…この人、僕のこと助けしてくれるだろうなって、ちょっと確信してたから目え合わせようとしてたの。

それはいいとして、彼は胸ポケットに手を入れたかと思うと、すぐに銃を取り出した。彼の右手の人差し指はすでにトリガーを引けるようにそえられてた。意味わかる？彼は銃を撃てる状態にして胸ポケットにしまってたってこと！あれ不意に発砲しなくて良かったね、ホントに。僕が注意したら彼も青ザメてたし。なんか子ども守った体になってるし。ちょっとした英雄キブンなんだよね、今！ミュータントタートルズみたいだろ!? そんな僕がここにいるだけでこの場は竜宮城だろ☆

■ 4. 学習者 S の作文

タイトル: ウミガメの神が自らをうたった話

「陸にあがり、運悪く子どもに見つかってしまった時のことです。私はその子達にいじめられていました」

と、ウミガメの神さまは語りました。

「そこへ通りかかった男が、何を思ったのか拳銃を取り出したのです。拳銃ですよ! お前たちは見たことがないでしょうね。あれは、私が産卵した卵がかえった時のことでした」

ウミガメの神さまは目を細めてゆっくりと語りはじめました。

「私は子どもが鳥や魚に食われながら旅立つのをかけながら見守っておりました。ところが、そこへいかにも腹立たしげな男がやってきました。男は何を思ったのか胸から拳銃を取り出し、私の子どもを皆殺しにしてしまったのです」

そこでウミガメの神さまは息をつき、少し落ち着いてから、また語りはじめました。

「私は気が付くと3人の子どもと男の間に割って入っていました。その男はそのまま引き下がってくれましたが運が悪ければ殺されていたでしょう。ですからお前たち。決して陸へ上がってはいけませんよ。卵からかえたらまっすぐ海へ向かうんです」

そういうことがあったので、それからウミガメの子ども達は、皆、卵からかえるとまっすぐ海へ向かうようになったのです。

■ 5. 学習者 P の作文

タイトル：無題

ウミネコの声が聴こえる。そろそろウミガメたちが卵を産みに浜に上がってくる時期だ。今年の見込みはかなりある。僕の名前は太郎。僕はこの地域のウミガメたちの浜を守る「ウミガメ保護事務所」の所長なのだ。僕の仕事は毎朝浜のチェック、ゴミ拾いなど…。卵を生んでいるところを見つけたら、すぐにその周りに柵をはって卵を守ることをしている。僕にとってウミガメは友だ。いや家族のようなものである。なぜなら僕は…ウミガメに育てられた少年だからである。僕は「ウミガメ」だったのだ。ウミガメと同じ呼吸法を身につけ、ウミガメの甲羅をまとい、ウミガメと一緒に暮らしていた。もちろん、竜宮城にも行ったことがある。あそこは海の世界でもっとも綺麗なところ。お宝もたくさんあるし、とってもすばらしいところだ。

しかし、僕はもうあそこに戻ることはできない。なぜなら僕は…「人間」だからである。9歳のときに僕は自分と家族との容姿が違うことに気がついてしまった。その前からうすうす違いを感じていたが、ある日、水面に映る僕達の姿を見てしまったのだ。ウミガメの中に人間がひとり、そこにいたのだ。

僕は13歳のときに家族と引き離された。人間の手によって。やはり僕も体が大きくなっていき、甲羅では隠すことができないほどになってしまったのだ。そしてある日、僕が海を泳いでいると、ゴーツと船のエンジンの音。そして人の声。そのころの僕には、人間の言葉はわからなかったが、やばい、と感じた。逃げようと動き出す前に僕は何者かによって、陸に引き上げられた。

「―――！」

「―――！」

「―――？」

何を言っているのかわからない。ここは船の上か。う…めまい…が…。そして、僕は気を失った。

目を覚ますと、僕は白い部屋にいた。四角いふわふわしたものの上に横になっていて、僕はゴワゴワしたものを体にまとっていた。僕はなんとなく理解した。ここが僕のほんとうの世界なのだ、と。目から水がこぼれ落ちる。これは何だ。僕はそのとき、初めて泣いた。

それから僕は人間になった。人間として生きた。二足歩行、そして言葉を勉強した。しかし僕には友達ができなかった。ニュースにも取り上げられ、僕のことをみんなが知っていたからだ。僕は今も甲羅をかぶっている。体ではなく心に。僕はそうして22歳にまで成長した。

ある日、僕はいつもどおり、朝の浜辺チェックをするために、家を出た。家から浜の距離はほんの数mだ。そこから海岸線にそって5kmほど歩きながら仕事をする。

1kmほど歩いただろうか、子ども達の元気な声が聴こえた。でも、いつもと何かがおかしい。岩の裏のほうだ。急いで駆けつけて様子を見ると、3人の小さな子ども達がウミガメをいじめていた。木の棒を使って叩いたり、足で蹴ったり…。

僕はとっさに拳銃を子ども達に向けた。実は常に、こうしてウミガメ達を守るために、ポッケに入れていたのだ。僕はウミガメを守るんだ。僕はウミガメを守るんだ。

子ども達はとても驚いていた。顔が真っ青になり手から棒が滑り落ちた。すると、とたんにウミガメが動き出した。なんとウミガメはむくっと起き上がり、甲羅ではないお腹の方を向けて子ども達を守ろうと盾になった。必死な表情で。しかも、僕に対して攻撃的な表情もうっすら見えた。

僕は驚いた。そして、はっとした。僕は子ども達に拳銃を向けただけでなく、僕の家族であるウミガメにも拳銃を向けてしまったのだ。

手のひらから拳銃が落ちた。砂の上に落ちて、さくっと音を立てた。

ウミガメが口を開いた。

「太郎くん。君はまちがっている。僕達を守ってくれるのは嬉しいけど、きっと他にやり方があるはずだ。君はとっても優しくいい子だ。人間として楽しく生きてほしい」と。

僕は人生で2度目の涙を流した。

夕日を眺めながら、もう誰もいない砂浜で僕は決めた。僕はもう逃げない。この世界に向き合う。そして人間としての自分にしっかり向き合う、と。

■ 6. 学習者 R の作文

タイトル：特別な亀

私は亀である。名前はピカソなみに長いので、ここでは名乗らない。私は人間の言葉を話せる。なぜなら私は特別な亀の子孫だからだ。私はかの有名な浦島の子を竜宮城へお連れした亀の直系十五代目にあたる亀なのである。私もまた、特別な亀なのだ。

さて、その私は誇り高き職業についている。それは子守である。世の中に数多くある動物、植物、或いは架空の生き物はもとより、様々なものをモチーフとしたキャラクターは人間の言葉を話し、そしてそれらは絶大な人気をもっている。しかし、実際に犬や猫、機関車が人間の言葉を話しているだろうか。いや話していない。全ては夢物語である。一方、私は特別な亀であるから、人間の言葉を話せる。これで人気がない訳はないことは自明であろう。特に子どもからの人気は甚だしい。まさに子守は天職であることがおわかり頂けたであろうか。

ここから本題に入る。ある日私はいつものように子守の仕事に精を出していた。鬼ごっこ、かくれんぼなど、ただしていても子どもは簡単には楽しまぬ。そこで罰ゲームを設けることとした。しかし子どもは負けず嫌いな者ばかり3人であった。結果、私が罰ゲームを受けることとなった。これも子守の務めのうちである。

彼ら子ども3人は、私が浦島の子を竜宮城へお連れした亀の直系十五代目にあたることを知っているのであろう。浦島の子の話に登場する子のように、しかし陰険さは微塵もなく私を軽く打撃しはじめた。

そうしているうち、ある男が通りかかった。彼はいぶかしげにこちらを見つめ、黙ってふところに手を入れた。私はそれを気にしつつ痛がる演技を続けた。

次の瞬間、あろうことかその男は拳銃を取り出し我々に突きつけたのだった。怯える子ども、状況がよく理解できず固まったようになる子ども、とっさに両手を挙げ降伏を宣言する子ども。その男に我々がどう見えたか知らないが、おそらく浦島の子と同じ心境なのだろう。彼の正義感が子どもの「悪事」を許せなかった。それは私にもわかる。しかし我々は遊んでいるだけなのである。もしここで通りかかったのが近所に住む主婦なら、我々を微笑ましい光景として眺め、軽く会釈して通りすぎるだろう。

先述の通り、私は子守である。その職業としての責任上、また十五代続く亀の家柄としての誇り、それ以前の亀として子どもを慈しむ気持ちから私はがっくがくに震える四肢をやっとのことで起こし、その男に立ち向かう決心をした。

子どもをかばい、男と対峙しつつ、私はここで死ぬのかと思った。考えてみれば江戸の

幕府も室町の幕府も十五代目で滅んだのであった。私は幕府を作った覚えはないが、ここで潔く散るのが日本の亀らしい姿だ。

覚悟を決め、男をにらむ。すると男は、おそらく私が彼に対峙するのが予想外の展開だったのであろう、銃口を下げ立ち去った。

私は彼に勝ったのだ！子どもらと無事を喜んだのち、警察に行った。後から件の男は銃刀法違反で逮捕されたと聞いた。それは良かった。ただひとつ納得いかないのが、子どもが私を庇うことをしなかったことである。私は特別な亀なのに。

■ 7. 学習者 M の作文

タイトル: 無題

ここは自由の国アメリカ。アリゾナ州オセアニア市に住むごく普通のペット好きの大学生ジェームズは、ハサミを14回続けて足の甲に落としてしまうという重症を負い、プロバスケットボール選手への夢を絶たれてしまいます。一方その頃、遺跡発掘隊の隊長であるミハエル・チューマッパはメキシコであるものを発見していました。

ある日、飼っていた金魚がアルコール中毒で死んでしまったので、新たなペットを求め、ジェームズはホイホイとペットショップへ向かっていました。道中、大きな海亀を3人がかりで討伐しようとしている子ども達を見掛けました。ペットを愛する会シルバーランクのジェームズは思わず立ち止まります。子ども達の行為を止めさせ、亀を助けようとしたというよりは、あわよくば亀を新たなペットにし、金を浮かせようという気持ちからでした。

ジェームズはホイホイと銃を取り出し、子ども達に冷たい銃身を向けました。自由の国なので銃くらいは当然のように所持していました。子ども達はピタリと動きを止め、かわいそうに怯えて青ざめているではありませんか。恐怖のあまり動けない子ども達を見て、基本的に性根の腐っているジェームズは、どS心をそそられるのでした。銃を見せつけ子ども達を脅すジェームズ。追い払いさえすればそれで良い筈なのに調子に乗って金目の物まで要求し始めました。

しかし、そこで文字通り立ち上がったのは亀でした。俊敏な動きで子ども達の前に立ちはだかり、それまでいじめられていたにも関わらず子どもを守ろうと必死に「止めて下さい!! お願いします!!」と叫びました。

しかし屈指のクズであるジェームズは、人の言葉を喋る亀の姿を見て、かの高名な探検家ミハエル・チューマッパが最近発見したという喋る亀文明の伝説を思い出し、目の前の

亀が持つ莫大な価値に気づき、いよいよ利用しようと考えました。

子ども達の命が惜しくばついでこい、と亀に告げたそのとき、

「警察だ!!」

という鋭い声でジェームズは自分の周囲の状況に気づきました。一瞬のスキをついて子どもの一人が警察に電話していたのです。すごい一瞬で。とっさに逃げようとしたジェームズでしたが、まだ足のケガが回復しきれておらず、うまく走ることができません。すぐに取り囲まれてしまいました。取り囲むのはボリスだけではありません。たくさんの野次馬…その中にジェームズの大学の教授であるトムスン先生も混じっていたのでした。トムスン先生はジェームズを見て「君は落第だ!!人生落第!!」と通達しました。

かくしてジェームズは大学生という人生の道を逸れ、刑務所から新たな道を歩むことになったのです。出会いと別れを繰り返して、人は成長するものですね。

2.4 学習者のコメント

学習者は、9cm × 13cm のコメント用紙を受け取り、7編の中から4編の作品へのコメントを書き記した。

なお、コメントは4作品を選択して提出することになっていたが、学習者のうち1名が規定のコメント数を超えて5つのコメントの提出を願い出ており、授業者がこれを許可した。

各作品へのコメント数は表1のとおりである。

表1: 呈示作文へのコメント数

対象作文	コメント数
1.学習者D	88
2.学習者M	80
3.学習者K	30
4.学習者S	30
5.学習者P	60
6.学習者R	32
7.学習者T	81
計	401

学習者の作文に対するコメントの全体的特徴として、作文ごとにほぼ一定の傾向が見受けられた。また、ほぼ全員の学習者が作品を読むことを楽しんでいたことが伺えた。

以下に典型的なコメントの一部を抜粋し掲載する。

学習者 D の作品に対するコメント

- 「発達と学習」の今までに習ったことのある知識がふんだんに盛り込まれていて、この授業を受講している人なら、誰もが引き込まれる構成になっていました。まさかここで『ユダヤ人のパン屋』の話が出てくるとは思いませんでした。
- なかなか思いつかない発想の作品だと思います。皆がああ3枚の絵から思いつくような物語を考えているにも関わらず、その内容に今までやってきた授業の内容が盛り込まれているのがすごいと思いました。
- 物語と現実がリンクしていて、異世界とのギャップがおもしろい。

学習者 M の作品に対するコメント

- 基本的な話の筋はそのままに、最後に意外性満載に落とす構図が最終的に読者を惹きつけ、また読者の印象に残る素晴らしい手法だと感じました。
- はじめの題名を見たときは、途中まで読んでいても「？」という感じでしたが、最期まで読んでなるほど!と思いました。これは2回読みたくなる作品です。
- 語り手のキャラクターがしっかり確立されていて、その人物像をイメージしながら、とても面白く読めました。

学習者 K の作品に対するコメント

- まさか彼が危ない場面だったとは思いませんでした。
- 銃を撃てる状態にして胸ポケットにしまっていたというところで「本当だあ!」と思いました。
- カメは子どもを助けるのではなく、若者を助けようと注意したという発想が良かった。

学習者 S の作品に対するコメント

学習者 S の作文は「アイヌ神謡」の話型を用いてまとめており、一種の「なぜなぜ話」の要素が取り入れられている。

- ウミガメが生まれてすぐ海を目指す理由も絡められていて、読み終わったときに満足感に似た感覚を味わうことができた。
- まるで本当にそのような神話がありそうな感じがした。
- ウミガメの神からその子どもへと語られている場面設定が個性的でよかった。

学習者 P の作品に対するコメント

- 亀に育てられた人間を主人公にするアイデアがすばらしいと思った。「僕はウミガメを守るんだ」と同じ文を繰り返すことで、主人公の考えが固定されていて必死であるということが伝わった。
- このお話は「涙」がキーワードだと思うのですが、これはウミガメが産卵するときに涙を流すということと掛けているのでしょうか。
- 他作品のほとんどが喜劇である中、感動劇を取って書かれたことに敬意を表します。前半のつくりが意外性に溢れていて驚きました。

学習者 R の作品に対するコメント

- 自意識過剰なカメが滑稽でおもしろかったです。「特別なのはわかったから」と言いたくなるほどしつこくて、いっそ清々しいほどでした！カメのお話の続編を読んでもたくなりました。
- カメがいじめられているのを想像させるシーンの絵を罰ゲームを受けているととらえ、カメが子守を仕事にしているなど、かなりの意外性でとてもおもしろかったです。
- 「浦島の子を竜宮城へお連れした亀の直系十五代目」「江戸幕府も室町幕府も十五代目で滅んだ」という2つの関連性がとても工夫したんだと思う。

学習者 T の作品に対するコメント

- 設定がとても細かくされていて、しかもその細かさが無駄ではなく、全てがストーリーに関係しているということも計算されていました。
- はじめは人物のつながりがよくわからないな、と思ったのですが、最後はしっかりまとめられているし、主人公の不幸な出来事が、失礼だけど面白いなと思いました。
- 彼の人生の転落ぶりを一つの教えとして論ずかのような最後の一言がとても印象的でした。

3 学習者による看图作文用絵図創作の取り組み

3.1 学習者の看图作文の理解

授業者は、学習者らに前時までの経験を経させた後、看图作文用絵図の自作に挑戦させた。その自作絵図を使って、第3者に看图作文を書いてもらい、それら一連の取り組みのプロセスについてレポートとして提出させた。なお、学習者には自作絵図を作る際の参考文献として、『看图作文指導要領』^[2]を紹介した。

学習者の幾人かは看图作文用絵図の設計のプロセスを通して看图作文の特徴をよく把握していることが伺える。

看图作文授業にはさまざまな特徴がある。たとえば、個人的な作文訓練に使用できるだけでなく、協同学習の形態をとると学習効果がさらに高まる。このことはこれまでの筆者らの研究によって重ねて確かめられてきている。学習者らはそのことを次のように直感的・体感的に感じ取っている。

(学習者 YA) いろいろな人と話すことによって多くの意見が出てきます。自分がまったく考えていなかった意見も出てきます。ですから、見方を変えるためには必要なステップなのかなと思います。このようなステップを踏むことにより、「何を書いていいかわからない」という学習者は、ほとんどいなくなると思います。

(学習者 MR) ワークシートや書き出しの文章などによって子ども達全員がその世界観を共有することができ、完成した作品を見せ合い、互いの作文から得るものをうまく取り込んで成長していくという環境はとても理にかなったあり方であると思う。

(学習者 FM) 一人で行うよりグループで行ったほうが楽しく、より充実した時間になりえる。(中略) 自分の意見を言い、他人の意見を聞く。それだけで世界が何倍にも広がるのが分かった。案外、自分とは違った視点の人はたくさんいて、それを聞くのは楽しい。面白い。興味深い。

(学習者 SS) 看图作文は、年齢に関係なく誰もが楽しく作文を書くことができるものだと思います。講義の中で体験したように、大学生でも大盛り上がりしますし、教員の導き方によっては小学校低学年の児童でも十分に作文を書くことができるものだとわかりました。

今日、多くの教育現場、特に高等学校や大学などでは、学習者の授業への積極的参加や学習者間のコミュニケーションが促進されている例は充分には多くないと推察される。このような現状において、看图作文授業は学習者参加型の授業を実現するための有力な手法となりうるといえる。

看图作文における「変換」活動は、絵図に描かれている事物・事象の取材活動と表現することができる。この取材活動はワークシートなどを用意して気がついた事柄を次々にメモさせて行わせることが多い。取材活動は、絵図に描かれているオブジェクトを抽出し、そのオブジェクトの属性を学習者自身の既有知識とリンクさせ、その後のオブジェクト同士がどのように影響を及ぼしあうかを考える（要素関連づけ）ための土台となる。学習者らはこのことを以下のように捉えている。

(学習者 TS) 絵図を見せて、それに対する問いかけや応答を繰り返していくうちに、子ども自身の中にあつた既有的知識と結びつき、イメージが更に膨らみます。そのように、教材を通じて子ども達とのコミュニケーションを図ることもさりながら、子ども達の想像力を育てることができます。

(学習者 KC) 作文、特に行事作文は「楽しかった」「頑張った」などのキーワードしか出てこないため文を作れないのだと思います。その点、看图作文は気がついたことのメモがそのままキーワードになってくれます。

変換活動が充分に行われると、オブジェクト同士の要素関連づけが活発になり創造的な発想が生じやすくなる。看图作文では互いの発想についてのネガティブな批判は意識的に行わないように指導している。これはブレンストーミング法と同様な効果をねらったものである。また、創造的な発想を生み出すためのもう一つの重要な要因として、絵図に内在する「意外性」が挙げられる。意外性の高い絵図は、学習者がそれを無矛盾に解決・説明しようとするために豊かな創造性が発揮される。

これらのことについても、コメントしている学習者は多い。以下はその例である。

(学習者 OY) 看图作文は、一人ひとりの想像力を生かし、作文という媒体を通して個性を生み出してくれる。私はそこに看图作文の魅力があると感じた。また、看图作文は、どんな作文が良いとか、どんな作文がいけないとか、そのような優劣を求めないものである。なので、学級でこの授業を行うと、絶対的な順位が生徒につ

けられることはないし、裏を返すと、生徒一人ひとりが主役になれるといえる。それは、生徒の個性を引き出すことをさらに促していると感じる。

（学習者 SS）看图作文の醍醐味は、「ちぐはぐ」にあると思う。前後の絵図や、周囲の雰囲気気にそぐわない状況を作り出せば、学習者はその問題を解消しようと想像力を働かせる。なぜこのような状況になったのか、なぜこれがここに存在するのか、と。

次の学習者 AC は看图作文用絵図の条件を以下のようにまとめている。

（学習者 AC）

1. ほとんどの人が体験していること、よく知っていることなど、自分の知識や経験と絡めやすい事柄をベースに構成されている。
2. 絵図はただ上手なだけではない。見た人がなじみやすい絵である。
3. ストーリーの中に好奇心や意外性を喚起させるような展開を織り込む。また、あえて絵図の中に疑問が隠されている。
4. 表情、服装、小物づかいなど、ストーリーを考える際の手がかりになるようなものに変化をつける。
5. 主人公をきめてしまわない。どの立場の目線からも考えられるようにする。

すべての学習者ではないが、上記のようにそれぞれのレベルで看图作文への理解を深めることができていることが伺える。

3.2 学習者の自作絵図と作文例

以下に学習者が自作した看图作文用絵図とその作文例を2つ紹介する。

3.2.1 学習者 ST の自作絵図

図7～図9は学習者 ST の自作絵図である。学習者 ST は、さまざまな年齢の学習者に対して利用できるように、舞台を遊園地、キャラクターには女の子とクマの着ぐるみを登場させるようにしたと述べている。すべての絵図を関連づけられるように風船を描き、女の子はどうしてしゃがんでいるのか、なぜ風船は破れることなく宇宙まで飛んでいってしまうのか、などの仕掛けを施したと説明している。



図7：学習者 ST の自作絵図「風船配り」1 枚目



図8：学習者 ST の自作絵図「風船配り」2 枚目

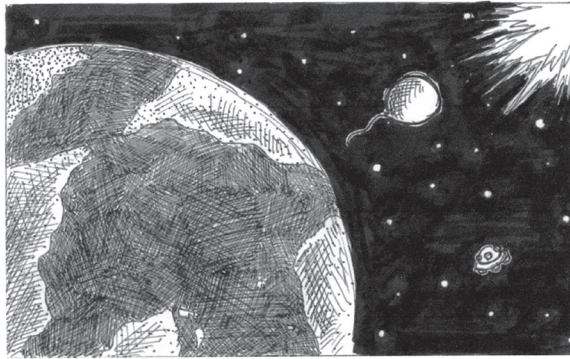


図9：学習者STの自作絵図「風船配り」3枚目

次の作文は上の絵図をもとに書かれた作文の一つである。必ずしも絵図に描かれているすべてのオブジェクトを利用しているわけではないが、個性的なストーリー構成を実現させている。

■学習者SKの作文

タイトル：無題

遊園地に来て、泣いている女の子がいた。なぜ泣いているのかな？

親とはぐれてしまったのだろうか、迷子センターに連れて行くにしても、すっかりしゃがみ込んでしまっていて、それすらも困難な状態であった。そんな時、僕たち風船の出番である。子どもは皆、不思議と僕らに惹かれるもの。この子も例外ではなかった。笑顔は向けてくれなかったものの、泣き止んでくれた。それに安心し、気を緩めてしまった時だった。突如強風が僕らを襲った。

着ぐるみの彼女も気を緩めていたのだろうか、僕らは彼女の手からスルリと抜け出して、大空へと舞い上がってしまった。どんどん離れゆく地上。僕らを見上げる人々。下から見た僕たちは、たいそう綺麗なんだろう、目を真ん丸くして僕たちを見つめている。人は空を飛べないからね、僕たちが羨ましいのだろう。

でもね、僕たちにはもっともっと大きい野望があるんだ。地球、という枠から外れたい。飛び出したいんだ。つまりそう、広い宇宙に行って浮かびたい。宇宙って男のロマンでしょ？

…で、今、僕らはどこに居るかって？草原で、おじさんによってゴミ袋に回収されている。僕たちは風船、字の如く、風がなければ船になれないのだ。ある程度まで上空へ行っ

てしまえば、中の空気が膨張してしまっって破裂してしまうのさ。

飛べない人々が飛べる僕たちに惹かれるように、僕たちも決して行くことのできない宇宙に惹かれる。でも人間には知識と行動力があるからね、もう宇宙にだって行けているんだ。そんな人々に負けないよう、今日もさまざまなイベント会場で人を喜ばすよ。いつかいくから、待っててね宇宙。

3.2.2 学習者 HM の自作絵図

図 10 および図 11 の絵図を作成した学習者 HM は、少女を主人公に考え、クマは主人公に悪さをする悪役として描いたと述べている。しかし、他の学習者に書いてもらった作文は、そのどちらをも主役として捉えており、登場人物の関係は想定したものとは異なっていた。そのことは逆に絵図の作成者である学習者を喜ばせていた。意外性のある作品は、授業者側にも喜びを与える。

この絵図そのものは、それほど大きな意外性は含まれていないが、創造的な作文を書く経験を積んだ学習者は、比較的容易に意外性のあるストーリーを構成できるといえる。



図 10：学習者 HM の自作絵図 1 枚目



図 11：学習者 HM の自作絵図 2 枚目

注) オリジナルの絵図はカラーである。また、絵図にタイトルは付されていない。

■学習者 Y の作文

タイトル：無題

ある日、くまのゴローは遊びに森へ行きました。その日はとても天気がよく気持ちのいい日でした。他の動物たちもたくさん遊んでいました。

「ああ、いい天気だなあ。何して遊ぼうかな。でも、遊び相手がいないや」ゴローが言いました。しばらく森の中を歩いていると、向こうから女の子がやってくるのに気がつきました。

「あ、あの女の子はみーちゃんだ！一緒に遊んでくれないかな」

そう思って近づいて行きました。実はゴロー、みーちゃんのことを好きなのです。でもいつも自分に素直になれず、気持ちとは反対の行動をとってしまうのです。この日も、

「がおおおおお!!!!」

気持ちとは反対の行動をとってしまいました。

「しまったっ…!!!」

そう思ったころには遅く、みーちゃんはおどろいた様子で逃げていってしまいました。

ゴローがしゅんとしてもと来た道に戻っていると、ダダダダダ…とこっちへ走ってくる音がしました。ゴローは何だろうと思って振り返ってみると、

「これでもくらえー!!!」

みーちゃんでした。みーちゃんはハチの巣ごと持って、ゴローに反撃したのです。

「わあああああ…」

ゴローはたくさんハチに追いかけて、走って逃げていきました。

「またやっちゃった…」

みーちゃんは言いました。みーちゃんも自分の気持ちに素直になれず、気持ちとは反対の行動をとってしまうのです。

…そう、みーちゃんもゴローのことが好きなのです。

4 研究のまとめと今後の課題

本研究において、授業者はまずはじめに文脈解釈型と物語創造型という2つのタイプの看図作文授業を通して、学習者に看図作文の原理・原則を理解させた。

無矛盾なストーリーを作るためのトレーニングとしては、文脈解釈型の授業が初学者には適している。その上で、論理的破綻を来さない外挿を組み入れ、豊かな創造性を発揮したストーリーを考案するために、物語創造型の授業の経験が理解を深める。

その後、授業者は学習者にオリジナルな看図作文用絵図の作成をさせた。短い期間のトレーニングであったにも関わらず、その中には比較的質の高い看図作文用絵図が見受けられた。若干の修正を施せば実際の看図作文授業で使用できる可能性のある絵図もいくつか存在している。

看図作文用絵図を設計する際には、描画の上手さよりもその絵図のテーマと絵図構成要素の選択、配置が重要となる。実際の授業で使用できる看図作文用絵図の設計トレーニングの条件や方法を精査していくことが今後の課題である。

参考文献

- [1] 鹿内信善：『やる気をひきだす看図作文の授業—創造的[読み書き]の理論と実践—』、春風社、2003。
- [2] 鹿内信善 編著：『看図作文指導要領—「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン—』、溪水社、2010。
- [3] 伊藤公紀、兒玉重嘉、石田ゆき、鹿内信善：“看図作文授業の新たな展開—イメージを生成する力とそれを読み解く力を育てる—”、札幌大学総合論叢、No.29、pp.75-97、2010。
- [4] 鹿内信善、兒玉重嘉、石田ゆき、渡辺聡、伊藤公紀：“看図作文の授業研究（VIII）—キャラクター設定法のための絵図作成と授業モデル—”、北海道教育大学紀要（教育科学編）、Vol.59、No.2、pp.195-206、2009。

（付記）本研究は日本学術振興会科学研究費「ヴィジュアルテキストを創造的に読む力を育てる教材開発・授業開発」（研究代表者：鹿内信善、課題番号：21530969）によって行った。